



# 町高教養講座通信

2年生版

都立町田高等学校 調査研究・研修部 平成30年11月27日発行

## 第2学年教養講座の要旨 [平成30年11月17日(土)実施]

11月17日(土)に本校の視聴覚教室において、2年生を対象に第2回目の教養講座を実施しました。今回は、「明治時代を通して、現代社会を考察する」という演題で、拓殖大学学事顧問の渡辺利夫先生をお招きして、ご講演いただきました。渡辺先生は、開発経済学をご専門にし、主にアジア諸国の経済開発を長年ご研究されてきました。そこで、明治時代において台湾の経済開発に活躍した、何人かの日本人を紹介され、そこから今の私たちが学ぶべきことをお話しされました。以下に、渡辺先生の講演の要旨をお伝えしたいと思います。



▲講演の様子

台湾は、現在も親日的な地域であり、先の大震災のときも真っ先に救援隊を派遣したり、多額の義援金を寄付してくれた。距離的にも近く、日本最西端の島である与那国島からよく見えるほど近くにある。台湾は日清戦争によって日本に割譲され、日本領になったが、当時は近代化・文明化から取り残された地域であった。日本は明治維新からそれほど年月がたっているわけではなく、欧米列強は日本が他の地域を運営できるのかということについて疑問視していた。当時は帝国主義の時代であり、弱肉強食が支配する国際関係の中で、当時の日本人はどのように厳しい時代を乗り切ったのか、台湾開発を例に話をしたい。

台湾といえば、台湾総督を務め、司馬遼太郎の「坂の上の雲」で有名な児玉源太郎であるが、経済開発の面からいえば、事実上児玉から権限を委任されていた後藤新平である。ちなみに後藤は拓殖大学の第3代総長である。後藤は、日本の植物を台湾に移植しても、生態系の違いからうまく育たないということは社会にも当てはまると考え、日本の政策を台湾に直接適用するのではなく、台湾の実情を徹底的に調査した。そのノウハウが今の国政調査に活かされている。また台湾銀行を設立し、貨幣を統一すると同時に、インフラ整備に力を注いだ。例えば、最北の基隆キールンから南の高雄まで縦断鉄道を開通させたり、基隆の港湾開発に力を注いだ。また、公衆衛生の向上にも努め、上下水道を整備し、普及率は東京市よりも高かった。またアヘン患者の激減にも貢献した。学校教育にも力を注ぎ、台北に帝国大学も設立した。その基盤整備が現在の台湾につながっていること間違いなく、植民地支配はネガティブにとらえられがちであるが、少なくとも当時の日本人は台湾を単なる搾取の対象とは見ていなかった。

次の紹介する日本人は、台湾では有名であるが、日本ではあまり知られていない。磯栄吉は東北帝国大学農学部を卒業後、約半世紀にわたって台湾で米の品種改良に取り組んだ人物である。当時のアジア地域は人口過剰による貧困の代名詞であった。彼は人工交配による品種改良に取り組み、膨大な数の実験を繰り返した後、ついに丈夫で単位当たりの収量が高く、味も良い米の開発に成功する。この米は「蓬莱米」と名づけられ、台湾の農業発展に大いに貢献した。また、八田與一は東京帝国大学卒業後、すぐに

台湾総督府に採用され、ダム建設などを通して、水利の向上に貢献した。台湾が大体亜熱帯に属しているので、四季の変化は見られず、雨季と乾季にわかれる。また台湾の中央に急峻な山脈が縦断しているため、雨季のときには急な川の流れにより洪水が発生し、米をダメにしてしまう。台湾では田に適する土地はわずかしかない。八田はそこにダムを造ると同時に、縦横に水路を引き、灌漑整備を整えることで、安定的な農業に貢献した。

これらの明治日本人の精神に共通しているのは「不羈独立」である。これは他に干渉されず、独立して使命をやり遂げるということである。自分の立身出世よりも、むしろ公に奉仕するという意識が強かった。少なくとも当時の彼らは、自分という個人と公という国家とを切り離していなかったし、もっと後の日本の植民地支配は批判されることになってしまうが、当時の彼らは台湾を搾取の対象としての植民地ではなく、同じ日本と考えていた。今は個人としての私と公としての国家を、対立的にとらえる見方が強いが、当時の明治の人々の考え方から学ぶべき点は多いのではないかと思う。

渡辺先生は、学位は経済学博士であり、明治の人をモデルに取り上げられました。今年は明治維新 150 年でもあるので、ご自身の開発経済学に関連する人物を取り上げながら、歴史そのものというよりは、そこから今の私たちの学ぶべき点を伝えてくださいました。日本史の授業の内容と重なるように見えながら、実は少し違う話だったので、生徒さんは少し戸惑ったかも知れませんが、多様な見方は伝わったことと思います。これからも早急に答えを求めるのではなく、じっくりと学ぶ気持ちというものを育てて欲しいと願っています。

(文責 井上 弘一)

## ～生徒のまとめから～

### 明治時代

明治時代の日本は非常に困難な道を進んでいたように思います。欧米列強の脅威から、帝国主義、日清、日露の二度の戦争の中、公の為、努力を惜しまない私たちの先陣達は、とても高い志と気概を持っているように映りました。その姿と現在の日本人の姿と比較して、今日、「公」の精神が足りないのではないか、というお話がありましたが、私は少しの希望を持っています。大震災を経験した日本では、「公」の精神が復活しつつあるように思えます。また、「公」の精神が重要なことは勿論ですが、「私」の精神も重要だと私は思います。それは、「公」の精神は危機の時代によく現れるように思われるからです。明治の先人達は、危機の時代に対応する形で「公」の精神を持ち、努力をし続けたのだと思います。明治以降の歴史は、現在の日本に非常に似ていると思います。大震災や恐慌によるデフレ不況など、似ている点が沢山あると思います。このような現在だからこそ、明治時代をもう一度見つめ直す必要があるように思います。特に、後藤新平という人物は、自然災害の多い、今の日本が参考にできる人物なのではないでしょうか。また、渡辺先生のおっしゃった教科書に書いてあることは必ずしも真実ではないという主旨のお話は、今後も大切にしていきたい考えですし、この考え方は、今年のノーベル賞受賞者の本所先生の考え方にもつながる所もあるのではないかと思います。



## 明治と私たちが生きている現代社会を考

る

渡辺さんから明治という時代を通して私たちが社会貢献に対してどのような姿勢であるべきかを考えるお話を聞いた。具体的には日清戦争で日本が勝利したことによって得た台湾社会に対してどういう思いで何をやったのかという内容である。

私は明治期の日本人の活躍を通して現代の社会貢献について考えたことがいくつかある。まず一つは、社会において本当のエリートとはどのような人かということである。後藤新平や児玉源太郎をはじめとした日本人は、台湾の現状を考え、ただ乱暴に統治するのではなく、1つ1つの政策をしっかりと成し遂げていった印象を覚える。当初は突然の日本の統治に戸惑ったり、混乱したりする人々もいたと思われるが、だんだんと台湾の人々に日本の統治が受け入れられていった理由は、純粋に「公」、つまり台湾社会に尽くす日本人の姿があったからであろうと私は考える。今でも彼らが台湾で広く知られていることを考えても、本当のエリートとは、自分のステータスを上げるために私欲に走るのではなく、「公」に尽くしていくような人なのだと考えた。

それでは、私たちが生きている現代社会は社会貢献に対してどのような姿勢であるべきか、というのがもう一つ私が考えたことである。今の日本では、明治期のように、国家と一緒に苦勞し、喜ぶというような姿は見られない。現状のまま国民だけが社会貢献に積極的になるというのはほぼ不可能だと思う。社会貢献は、貢献したいと思えるような社会、つまり、国家が無いといけないと考えるからである。明治時代と現代とでは国民の参政の様相や国家体制が大きく違っていて、全てを明治からそのまま受容するというのは難しい。したがって、国民が賛成できる国家をつくり上げていき、その国家へ私利私欲ではなく純粋に貢献していくことが、今の私たちにできることなのではないかということが、渡辺さんのお話から考えた私の最後の結論である。

## 現代の「公」とは何か

明治時代、台湾の発展に対して多大な貢献を果たした日本人がいる。満州鉄道は後の地域発展の足がかりになったと主張する人もいる。しかし、多くの場合、それらについて紹介されたり、大きく取り上げられたりすることはない。なぜなら、それは、帝国主義の国が支配する地域に行った「施し」のように見え、それは本国に対する見返りを目的とした、ナショナリズムに基づくものであるかもしれないからである。

現代において「ナショナリズム」という言葉はやや悪いイメージを持たれている。そこには第二次世界大戦における弾圧や暴走、悲劇の印象がつきまとうからであるだろうが、それと同じくらい、あるいはそれ以上にグローバル化の影響があるからではないだろうか。技術が発展し、人や物の行き交いに障壁がほとんどなくなった現代において、ボーダーレスな現代は「良いこと」だとして（少なくとも多くの先進国では）受け取られている。ナショナリズムはそこに「国」や「民族」という線を出現させるために、現代では「悪」として受け取られやすいのだと思う。「健全なナショナリズム」などといった使い方はそのことをよく示している。

「滅私奉公」と言うが、この「公」とは何を指しているのだろうか。明治時代では簡単だった。「国」という分かりやすい括りがあり、しかもそれは良いものとして扱われていた。では、個人主義の進む現代では？ ある人は「社会」と答えるかもしれない、ある人は「人類」と答えるかもしれない。あるいは、「個人の権利」を侵害してまで奉仕する必要はない」と答えるかもしれない。しかし、結局のところ、

私たちは未だ「国」という単位を重用している。「ナショナリズム」について考え直す必要があるのではないだろうか。

### 誰かのために

私は外国に行ったことがないため、他の国との関わりを今まであまり意識してこなかった。だからもちろん、台湾にも行ったことがなく、日本との親交の深さについても実感したことがなかった。

今回の講演を聞き、何か新しいものを創り出すことの素晴らしさを改めて実感することができた。磯永吉さんが作った蓬莱米、八田與一さんが作った世界初のダム。どちらも台湾にとっての初の試みであり、その後の台湾・アジアの発展に大きな影響を与えたと聞いた。そもそも、日本人が台湾を「植民地」支配をしているのにも関わらず、奴隷制ではなく、日本と共に発展していく方向にもっていったことに驚きを感じた。日本を一番に考えて、台湾を「利用する」という形でもよかったと思うが、明治時代のエリート的考えでこのようになったのだろう。最後のまとめでもあったように、磯や八田は「日本」のためではなく「台湾」のために、また、「私情」のためでなく、「公」のために生きた。彼らの人生は多くの人々に大きな影響を与え、多くの命を救ったと言えるだろう。

今、現在の高校生という身分の私は、自分のことのために生きるのに精一杯だ。多くの学ぶべきことを抱えているためである。しかし、「公」とまではいかなくても、家族や友人などの身近な人のために役に立つ生き方ならばできるのではないか。むしろ、現段階でできているのかもしれない。勉強を教え合ったり、不安なことを共有しあったりすることで、誰かに少しでも影響を与えているとしたら、今の私にできる最大限のことをしていると断言できると思う。そして、いつか、一つの職を得て自立するようになったときに、家族や友人に加え、多くの人々の「人生の手助け」をしていきたい。また、誰かに助けられ、その倍以上に誰かを助ける、そんな人生を送っていきたい。

### 義務教育の大切さ

私は今回の講演を聴いて、明治時代に活躍した人々の仕事に対する姿勢に感銘を受けた。また、明治の彼らと現代の私たちにおいて、内面的な格差があると考えた。

まず、明治時代に活躍した後藤新平や児玉源太郎らの仕事に対する姿勢は、とても真っ直ぐだと感じた。未開発だった台湾を日本と同じレベルの国にまで成長させようという純粋な向上心を原動力に変えて仕事をするのは、誰もがすることではないと思う。そこまでの熱意があり、前向きな姿勢があったからこそ、彼らは現地の人々にとって大きな存在になったのではないだろうか。

次に、現代の私たちは、純粋な心を失っていると私は思う。私も含めて多くの人々が「夢」を失っているのではないだろうか。生活の安定のために働く、そのために大学に行く、そのために勉強するという過程が一般化している日本は「暗い」と私は思う。それに比べ、明治の人々は「日本を大きく成長させよう」という大きな夢を、国のトップの人たちだけでなく、国民の多くが持っていたであろう。だからこそ、短期間であれだけの成長を遂げられたし、人々の心は明るかったのではないだろうか。「何の為に働くのか」という質問に対して明るい笑顔ではっきりと答えられる人は、現代社会に何人いるのだろうか。私たち一人ひとりが「私欲を満たすこと」だけを目標に働くのではなく、「日本全体を成長させる」という志を持って働くことができれば、日本はもっと明るくなると私は思う。いきなりそのような考え方に変わる人はいない。大人なら尚更だ。日本の義務教育は子ども達に対して「夢」を見ること、「志」を持って働くことの大切さをしっかりと教えなければならない。